

春の鹿幻を見て立ちにけり

藤田湘子

句集『神楽』の平成十年の第一句目は、「亡き師ともたたかふこころ寒の入」であり、秋櫻子を遙かに感じていたことが伺える。そして、この句の一句前には「春憂しと角ある鹿はたたかへり」が並んでいいる。偶然と考えるより意識的に配列したのではないかと思えてしまう。

草食獣の鹿は、物音に敏感である。人間で言うなら肘や膝を折って腹ばいになった姿勢から、物音ですつと首を立て、両耳を前方に向け何事かと心配そうな顔をすする。そして、いったん顔を下に向けたかと思うと首を前に振り出し、その反動で前足の肘を伸ばし、同時に後足の膝も伸ばし一氣に立上がる。

鹿が幻を見たなら、きつと血氣盛んな若鹿だろう。

1998年（h10作）第十句集『神楽』 鑑賞・轍郁摩